

## 秦宗巴(1550-1607)に関する新発見

アンドリュー・ゴープル

Department of History, University of Oregon, USA./北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

寿命院秦宗巴は曲直瀬家の門流が発生した近世医療文化の形成に重要な役割を果たした人物である。『寛政重修諸家譜』によると丹波国出身で、吉田意安宗桂のもとで医学の勉強を始め、後曲直瀬道三の門弟になり、天正16年から慶長元年の豊臣秀次自決までその侍医を勤めた。慶長6年からは徳川家康と秀忠の侍医を勤め、その後京都に戻り死去。有能な博学者で中国古典、日本文学、医学書に詳しくあった。著述には『素問注抄』『医学的要法』『鍼灸参伍の方』『炮炙詳鑑』『本草序例抄』等の医学書があったがほとんどが失伝。『徒然草抄』と仮名草子類の『犬枕』は伝わっている。

上記のほか、宗巴の生涯と活動に関する資料はほとんど知られていない。ところが同時代の資料に公家兼町医の山科言経の日記が存在し、それには文禄2年から慶長11年まで14年間、少なくとも320件の宗巴関係記載がある。以下それを整理して宗巴の社会的、書誌的、および医学的活動について述べる。

社会的活動については、当時の京都の権力者と文化人、例えば徳川家康、石川家成、曲直瀬道三、玄朔、正純、吉田宗桂、宗恂、山科言経、古市宗超、大和宗恕、本願寺の顕如、顕尊、西御方、小瀬甫庵、大村由己ほかと親密な関係を持った。秀次の侍医として湯治に随従し、秀次老実父の三好吉房が煩った時、保養のため尾州に招かれている。秀次切腹事件の連座にあたっては、家康の庇護を受け、量刑は私宅の没収に止まり、京での滞在と医療活動継続を許された。翌年には妻が死去。京の旧宅は没収されたため堀出町に新居を設け、門人を集め、診療活動を行った。

文学的活動については蔵書に『周礼句解一卷』『広韻』『碁経』『山海経凶』『枕草子』『大鏡』『続世継』『金葉集』『壺囊抄』『日本書目録』『山谷』『年代記』が確認できる。『韻鑑』は寿命院の相伝。「寿命院ニテ大学中庸 孟子等新刻取テ帰了」の記載から推測すると宗巴は当時振興した印刷文化に関心をもち、漢籍の熱心な収集家として知られていた。山科言経から借覧した書に『薬方秘本』『拾芥抄』『明月抄』『八代集』『井蛙抄』『古今集』などがある。さらに定家卿懐紙、飯尾彦左衛門尉手本他短尺、古筆、筆跡など、昔人の遺筆類も好んで集めた。『徒然草抄』の著述にあたってはしばしば言経に教えを乞い、脱稿後すぐに観覧に供された。

医療活動については、約32年間、医師として活躍した。所蔵した医書は先述の失伝書のほか、曲直瀬流の『医灯配剂』や『濫墨配剂』がある。薬医寿命院作切紙の記載からは切紙の存在が知れ、また、牛玉(牛王、牛黄)清心円薬方書や蘇香円方書も所有していた。薬剤としては牛玉清心円、至宝丹、蘇香円、白朮丸、快気散、蜜丸などの処方名や投薬が確認される。鍼を用いたかはわからないが、良く灸治を行った。灸所は四花灸、百会、曲口、絶骨や膏肓の灸所が記されている。

患者については有力者はもちろんのこと、一般の町人も含まれていた。慶長3年から同6年の間、山科言経、妻北向、息子阿茶丸の専任医師をつとめ、治療に関する記載は130にも及ぶ。これにより言経家の病状相談、診断、診察、投薬、処方、見舞い、灸治、診脈、持薬などのことがわかる。「寿命院へ所労様書之薬取遣了。五包、蜜丸一貝来了」や「寿命院子息宗徳へ罷向了。対顔了。予持薬方寿命院所可有之間、所望之由申了。明日相写送之由也」の記載からは、宗巴が患者の長期病薬記録を保存し、患者の目前で持薬の調合を行ったことがうかがえる。

治療の雰囲気は次の例から伺える。「予所労散々間平臥了。寿命院呼ニ遣了。来了。脈ヲトラセ了。薬調合三包置。予薬箱ニテ成。入麵ニテ勸酒了」「寿命院へ罷向脈ヲトラセ持薬談合了。北向モ方談合、又阿茶丸霍乱気談合了。方書之給了」「寿命院被行之間、可同道之由、内々西御方ヨリ承間、如此。興門診脈了。四花灸、同西御方診脈了。其外門跡御ウへ、御姫御方己外診脈集有之。夕食相伴了」。